

# 青年期の友人関係における行動・欲求・他者認知

松尾 紀美子<sup>\*1</sup>・村瀬 俊樹<sup>\*2</sup>

Behaviors, Desires, and Perceptions of Others in Adolescent Friendships

MATSUO Kimiko, MURASE Toshiki

キーワード：相互理解，同調，青年期，友人関係

## 要旨

本研究は、中学2年生、高校2年生、大学3年4年生を対象として、親しい友人との関係の持ち方について、相互理解の友人関係と同調する友人関係の2側面から検討した。その際、実際にとる行動、そうしたいという欲求、まわりの人が一般的にとっていると思う他者認知の3つの観点からこの2側面を検討し、その発達的变化、および、行動・欲求・他者認知の関連性を検討した。その結果、学校段階の進行とともに、相互理解の友人関係は、行動・欲求・他者認知のいずれにおいても強くなり、同調する友人関係は、行動・欲求・他者認知のいずれにおいても弱くなっていた。また、他者は自分よりも相互理解の友人関係を行っておらず、同調する友人関係を行っていると認知されていた。相互理解の友人関係に関する行動は、学校段階の進行とともに、他者認知の影響が小さくなり、自分の欲求の影響が強くなることが明らかとなった。同調する友人関係については、中学生では欲求の媒介によって他者認知が行動に影響を与えているが、学校段階の進行とともに他者認知の影響はなくなり、自分の欲求に基づいて行動することが明らかとなった。青年期において、他者認知の影響を受けつつも、それが弱くなり、自立した友人関係の構築をしていく過程が論じられた。

養育者からの自立への欲求が高まり自立した大人として社会に出るまでの青年期は、心身ともに大きな変化が見られる時期である。青年期における友人関係は、心理的な安定化、社会的スキルの学習、自分がそうありたいと思うモデルの機能など様々な機能を果たしており（松井，1990）、その重要性から、多くの研究が積み重ねられてきた（平石，2010；

岡田，2007）。本論では、青年期を中学生～大学生およびそれと同年代の時期とし、青年期における友人関係の発達的变化を明らかにする。

## 相互理解の友人関係と同調する友人関係

岡田（1999）が伝統的的青年観と呼んでいるように、青年期には、自己に対する内省が高

\*1 島根大学法文学部卒業生

\*2 島根大学人間科学部

まり、友人関係は、人格的共鳴や同一視など内面と深く密接に関わるようなものになると考えられてきた。一方で、現代の青年においては、友人関係の希薄化が指摘され、青年が対人関係の距離に関する葛藤を抱えていることが指摘されている。たとえば、岡田（1995, 1999）は、現代青年の友人関係は、内面的な関係を持つとしようとするか他者の領分には踏み込まず表面的な関係にとどめようとするか、相手を傷つけず自分も傷つかないよう気づかいをするか、友人と楽しく面白く過ごす群れを志向するかどうかという点から青年期の友人関係を捉えることができることを示している。上野他（1994）も、友人と互いの領分に踏み込もうとするかどうかといった心理的距離の取り方、および、友人にどの程度同調しようとするかという点から青年の友人関係の持ち方を捉えることができるとしている。また、藤井（2001）は、近づきたい-近づき過ぎたくない、離れたい-離れ過ぎたくないという心理的距離の取り方に関する葛藤から青年期の友人関係を捉えることができることを示している。

以上のことから、青年期の友人関係を捉える視点として、内面的な深い関係を持って相互理解しようとするのかどうかといった心理的距離の取り方、友人と一緒に同じよう行動しようとするかどうかという同調的な行動をとろうとする傾向という2つの視点を持つことが必要であるように思われる。

それでは、友人と相互理解をしようとする傾向、同調的な行動を取ろうとする傾向は、青年期の間にどのように変化するのだろうか。落合・佐藤（1996）は、中学生・高校生・大学生を対象として同性の友人との付き合い方に関して質問紙調査を行った結果、自己を開示し積極的に相互理解をしようという付き合

いは学校段階の進行とともに強くなることを明らかにした。一方、みんなと同じようにしようとする同調的付き合い方は学校段階の進行とともに弱くなることを明らかにした。したがって、青年期の間に、相互理解をする友人関係は強まり、同調をする友人関係は弱まると考えられる。

### 実際の行動と欲求

ところで、私たちが実際にとる行動は、自分自身がこうありたい、このようにしたいと思っていることと必ずしも一致しているわけではない。特に、新しい行動様式を獲得する時期においては、自分がこのようにしたいという欲求と、自分が実際に行う行動との間にずれが生じうると考えられる。友人関係のあり方が大きく変化する青年期においては、友人関係をこのようにしたいという欲求と実際に行動としてとっている友人関係との間にずれが生じている可能性がある。落合・佐藤（1996）においては、青年が友人関係について持つ欲求についての質問と実際に友人関係においてとる行動についての質問が混在しており、友人関係に関する行動と欲求がそれぞれどのように変化するのかが明確にされていない。

榎本（2000）は、中学生・高校生・大学生を対象として、同性の友人との関係に対する欲求と行動を質問紙で調査した。その結果、互いの個性を尊重し自分の意見を表明しあいいたいという相互尊重欲求は学校段階の進行とともに高くなっていた。また、これからの生き方や人生観などについて話し合うなど行動としての相互理解活動も、学校段階の進行とともに強くなっていた。したがって、相互理解の友人関係については、実際の行動についても欲求についても、学校段階の進行ととも

に強くなると考えられる。同調する友人関係については行動と欲求を別々に検討した研究は見当たらないが、和田（1996）も、中学生・高校生・大学生を対象として同性の友人関係に望むものを調査した結果、何かにつけ一緒に行動するという同調的な共行動に対する欲求は、高校生から大学生にかけて弱くなることを明らかにしており、同調する友人関係は、行動面においても欲求面においても学校段階の進行とともに弱くなると考えられる。

それでは、青年期の友人関係における行動と欲求との関係はどのようなになっているのだろうか。新しい行動様式を獲得するときには、まずその行動様式に対する欲求が発達するが、実際にその行動様式をとることができるためには時間が必要となり、行動の発達は欲求の発達に遅れることが予想される。したがって、中学生においては、相互理解の友人関係を持つことを欲求として持っていたとしても、それを行動として実行できるとは限らないため、行動と欲求との関連性は比較的弱いと考えられる。しかし、学校段階が進むにつれて、欲求として持つ行動を実際に実行できるようになると考えられ、行動は欲求を反映する程度が強くなると考えられる。そのため、学校段階が進むにつれて、相互理解の友人関係に関する行動と欲求との関連性は強くなっていくと考えられる。一方、友人と同調する関係については、学校段階が進むにつれて弱くなっていくと想定されるものであり、中学生の時期にすでに行動様式として獲得されているものである。そのため、新たな行動の獲得における欲求と行動の発達の時期のずれは想定しにくい。したがって、同調する友人関係に関する行動と欲求との関連性の強さは、学校段階によって特に違いは見られないであろう。

### 実際の行動と他者一般の認知

ところで、私たちが実際の友人関係をどのように持つかということには、私たちがどのような友人関係を持ちたいと思っているかという欲求だけではなく、私たちのまわりの人たちがどのような友人関係を持っているかという他者一般についての認知が関係していると考えられる。

私たちがある行動をとる時、私たちは、自分が生活している社会の中で人々が一般的にどのような行動をとっているのかを参照し、自分のとる行動がその社会の中で適応的なものかどうか、自分がその行動をとった時、まわりの人からポジティブな反応を得られそうか、ネガティブな反応を避けることができそうかなどを値踏みしている。さらに言うと、私たちは、まわりの人たちがどのような行動をとっているかどうかだけではなく、まわりの人たちがどのような行動をとっていると思うか、まわりの人たちがどういう行動に対して肯定的・否定的評価をすると思うか、すなわち、まわりの人の行動や認知に対して自分が持つ信念をも参照している。

そこで、本研究では、青年が、自分のまわりの友人たちが一般的に相互理解の友人関係をとっているかと思うのかどうか、自分のまわりの友人たちが一般的に同調する友人関係をとっているかと思うのかどうかという他者認知をも調べ、他者一般が行っていると認知する友人関係と自分が実際に取る友人関係や自分が友人関係について持つ欲求との関連性をも検討することとする。同調するということは、他者の行動や考えを参照して自分の行動や考えもそれに合わせることである。友人たちへの同調傾向が学校段階が進むにつれて弱くなることから考えると、他者一般がとっている友人関係のあり方に関する認

知が自分の友人関係行動に及ぼす影響は、学校段階の進行とともに弱くなっていくと考えられる。したがって、相互理解の友人関係についても、同調する友人関係についても、自分が実際に行う友人関係と自分のまわりの他者一般が行っているという認知する友人関係との関連性は、中学生において相対的に強く、学校段階が進むにつれて関連性は弱くなっていくと考えられる。

### 本研究の目的と仮説

以上のことから、本研究の第1の目的は、中学生・高校生・大学生における同性の友人関係について、相互理解の友人関係と同調する友人関係に焦点をあて、その発達の变化を検討することである。相互理解の友人関係を実際の行動としてとる傾向は学校段階が進むにつれて強くなるだろう（仮説1）。一方、同調する友人関係を実際の行動としてとる傾向は学校段階が進むにつれて弱くなるだろう（仮説2）。欲求に関しても、相互理解の友人関係をとりたいという欲求は学校段階が進むにつれて強くなるだろう（仮説3）。一方、同調する友人関係をとりたいという欲求は学校段階が進むにつれて弱くなるだろう（仮説4）。以上の4つの仮説に加えて、自分のまわりの他者一般がとっていると考える他者認知としての友人関係についても、相互理解の友人関係を他者一般がとっているとという認知は学校段階の進行とともに強まり、同調する友人関係を他者一般がとっているとという認知は学校段階の進行とともに弱まるのかどうかを検討する。

本研究の第2の目的は、中学生・高校生・大学生における友人関係について、実際に行動としてとっている友人関係と、とりたいという欲求としての友人関係、および、他者一

般がとっていると認知している友人関係の関連性を明らかにすることである。相互理解の友人関係については、実際の行動と欲求との関連性は、学校段階が進むにつれて強くなる（仮説5）が、実際の行動と他者一般の認知との関連性は、学校段階が進むにつれて弱くなるだろう（仮説6）。一方、同調する友人関係については、実際の行動と欲求との関連性は、学校段階によって異なる（仮説7）が、実際の行動と他者一般の認知との関連性は、学校段階が進むにつれて弱くなるだろう（仮説8）。

## 方 法

### 調査協力者

257名を調査対象者としたが、17名については回答不備などがあったため分析から除外し、中学2年生109名（男57名、女52名）、高校2年生69名（男33名、女36名）、大学3・4年生60名（男30名、女30名、平均年齢21.3歳）合計238名を分析対象者とした。

### 質問の種類

同性の親しい友人たちとの友人付き合いを聞くこととし、大きく3種類（自分の実際の行動、自分がこうしたいという欲求、自分のまわりの友人たちがどうしていると思うかを問う他者一般の認知）の問い方で質問した。自分の実際の行動（以下、行動とする）を問う場合は、「あなたが実際にどのような行動をしているか」を以下に述べる15の項目について質問した。自分の欲求（以下、欲求とする）を問う場合は、「あなたがどのような付き合い方をしたいと思っているか」を15項目について質問した。他者一般の認知（以下、他者とする）を問う場合は、「自分のま



わりの友人たちが『同性の親しい友人たち』とどのような友人付き合いをしていると思うか」を15項目について質問した。

### 質問項目

これまでの研究（榎本, 2000; 落合・佐藤, 1996; 岡田, 1999; 和田, 1996）を参考として、友人たちとの相互理解に関する項目と友人たちへの同調に関する項目を作成した。行動に関する質問項目は、友人との相互理解に関するものは、「喜びや悲しみを分かち合う」、「意見が違うときに納得するまで話し合う」、「将来についての話をする」、「お互いの欠点や長所の話をする」、「自分の性格や行動についての話をする」、「これからの生き方や人生観などについての話をする（人生観＝人生の目的、生きる価値などについての考え方）」、「自分の趣味についての話をする」、「お互いに不満に思っている点を言い合う」の8項目、友人への同調に関するものは、「仲間はづれにされないようにする」、「できるだけ友人たちと同じように行動する」、「友人たちと意見が違ってでもできるだけ自分の意見を言うようにしている（逆転項目）」、「何をすることも友人たちと一緒にする」、「友人たちと意見を合わせようとする」、「流行遅れにならないようにする」、「友人たちと違うことはしないようにする」の7項目であった。

欲求に関する質問項目は、この15項目の文末を「～したい」のように変換して用いた。また、他者に関する質問項目は、自分のまわりの友人たちの友人付き合いについて問う形とし、この15項目の文末を「～している」のように変換して用いた。

質問は、いずれも7件法（全然あてはまらない～まったくあてはまる）で選択を求めた。

### 手続き

調査は無記名の質問紙調査によって実施した。質問の順番は、行動、欲求、他者の順とし、それぞれの質問の仕方の種類の中では15項目の順番は無作為に決定した。調査は2002年に実施した。

## 結果

### 得点化

各項目への回答は、「全然あてはまらない」を1点～「まったくあてはまる」を7点として得点化した。

### 因子分析

3種類の質問の仕方それぞれについて、各学年別に、15項目の回答を最尤法で因子分析を行った結果、いずれの因子分析においても、第2因子から第3因子にかけて大きく因子寄与が減少していた。また、プロマックス回転後の因子負荷量を見ると、いずれの因子分析とも、第1因子と第2因子は、相互理解の因子、および、同調の因子と解釈された。そこで、3種類の質問の仕方それぞれにおいて全学年込みで因子分析を行うこととした。

行動に関する15項目について、全学年込みで最尤法による因子抽出を行い、プロマックス回転後に示された因子負荷量を表1に示す。

第1因子は同調の因子、第2因子は相互理解の因子と考えられる。同様の方法で欲求に関する15項目、他者に関する15項目の因子分析を行った結果、やはり、相互理解の因子、および、同調の因子が得られた。

行動、欲求、他者それぞれの因子分析で、相互理解の因子に高い負荷量を示した項目、同調の因子に高い因子負荷量を示した項目は

表 1. 行動に関する項目の因子負荷量

項目	F1	F2	共通性
何をするにも友人たちと一緒にする	0.77	0.04	0.57
できるだけ友人たちと同じように行動する	0.77	-0.07	0.62
友人たちと違うことはしないようにする	0.76	-0.03	0.59
友人たちと意見を合わせようとする	0.72	0.05	0.50
仲間はづれにさせないようにする	0.67	0.00	0.45
流行遅れにならないようにする	0.57	0.14	0.30
喜びや悲しみを分かち合う	0.22	0.68	0.42
自分の性格や行動についての話をする	0.02	0.67	0.45
将来についての話をする	-0.04	0.63	0.42
お互いの欠点や長所の話をする	0.01	0.61	0.37
これからの生き方や人生観などについての話をする	-0.14	0.55	0.37
意見が違うときに納得するまで話し合う	0.03	0.49	0.24
友人たちと意見が違っててもできるだけ自分の意見を言うようにしている	-0.30	0.44	0.36
自分の趣味についての話をする	0.03	0.44	0.18
お互いに不満に思っている点を言い合う	0.04	0.43	0.17
因子寄与	3.41	3.07	
因子間相関	-0.29		

多少異なるものの、ほぼ同じであった。本研究では、実際の行動を軸とし、それとの関係で自分の欲求や他者一般の認知も考えていくので、行動に関する因子分析で相互理解の因子に 0.5 以上の因子負荷量を示した 5 項目の平均点を行動・欲求・他者のそれぞれについて求め、それぞれの相互理解得点とし、行動に関する因子分析で同調の因子に 0.5 以上の因子負荷量を示した 6 項目の平均点を行動・欲求・他者それぞれについて求め、それぞれの同調得点として以下の分析を進めることとする。

相互理解の学校段階による違い

相互理解得点を従属変数とし、学校段階

(中学 2 年・高校 2 年・大学 3 年 4 年) × 質問の種類 (行動・欲求・他者) の 2 要因分散分析 (学校段階は調査協力者間要因, 質問の種類は調査協力者内要因) を行った結果, 学校段階の主効果 ( $F(2, 235) = 54.94, p < .001, \eta_p^2 = .32$ ), 質問の種類の主効果 ( $F(2, 470) = 43.30, p < .001, \eta_p^2 = .16$ ) が見られた。交互作用は見られなかった。

多重比較の結果, 中学生よりも高校生の方が, 高校生よりも大学生の方が相互理解得点が高かった。また, 行動および欲求よりも他者の方が相互理解得点が低く, 行動と欲求の間には有意差は見られなかった (図 1)。

仮説 1 および仮説 3 を検証するために, 行動, 欲求, 他者それぞれについて, 学校段階を独立変数とする 1 要因分散分析を行った結果, 行動においても欲求においても他者においても学校段階の主効果が見られ, 学校段階が進むとともに相互理解得点が高くなっていった。したがって, 仮説 1 および仮説 3 は支持された。

また, 各学校段階別に質問の種類と比較を行ったところ, いずれの学校段階においても,

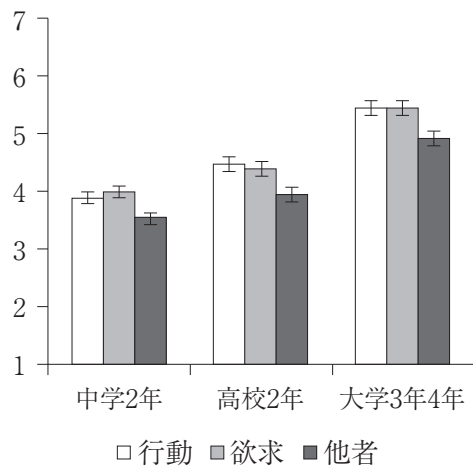


図 1. 相互理解得点平均値 (誤差棒は標準誤差)

他者が行動および欲求よりも相互理解得点が低く、行動と欲求との間には有意差は見られなかった。

### 同調の学校段階による違い

同調得点を従属変数とし、学校段階（中学2年・高校2年・大学3年4年）×質問の種類（行動・欲求・他者）の2要因分散分析を行った結果、学校段階の主効果（ $F(2, 235) = 22.72$ ,  $p < .001$ ,  $\eta_p^2 = .16$ ）、質問の種類の主効果（ $F(2, 470) = 57.76$ ,  $p < .001$ ,  $\eta_p^2 = .20$ ）が見られた。

多重比較の結果、中学生よりも高校生の方が、高校生よりも大学生の方が同調得点が低かった。また、行動よりも欲求の方が、欲求よりも他者の方が同調得点が高かった（図2）。

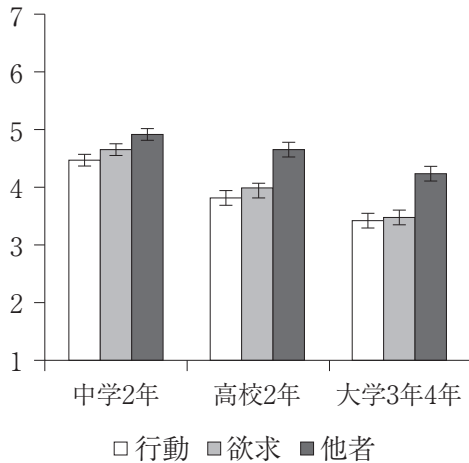


図2. 同調得点平均値  
(誤差棒は標準誤差)

また、学年×質問の種類の交互作用が見られた（ $F(4, 470) = 3.91$ ,  $p < .01$ ,  $\eta_p^2 = .03$ ）。各学年ごとに質問の種類の単純主効果を調べたところ、いずれの学年でも質問の種類の単純主効果が見られ、中学生では行動よりも欲求の方が同調得点が高く、欲求よりも他者の方が同調得点が高かった。しかし、高校生と

大学生では、行動と欲求よりも他者の方が同調得点が高かったが、行動と欲求の間には有意差は見られなかった。それぞれの質問の種類ごとに学年の単純主効果を調べたところ、いずれの質問の種類でも学年の単純主効果が見られ、行動と欲求では、中学生よりも高校生の方が、高校生よりも大学生の方が同調得点が高かった。したがって、仮説2および仮説4は支持された。他者については、中学生より大学生の方が同調得点が高かったが、高校生については他の学校段階との有意差は見られなかった。

### 行動・欲求・他者間の関係

行動、欲求、他者認知の間に関連性が見られるかどうか検討するために、学校段階別に、それぞれの間のピアソンの相関係数を調べた。その結果、相互理解の友人関係については、いずれの学校段階においても、行動と欲求間、行動と他者間、欲求と他者間のいずれにおいても有意な正の相関がみられた（表2）。

表2. 相互理解に関する各質問の種類間の相関係数

	中学 2年	高校 2年	大学 3年4年
行動と欲求	0.60**	0.63**	0.80**
行動と他者	0.73**	0.57**	0.66**
欲求と他者	0.61**	0.56**	0.54**

\*\* $p < .01$

同調する友人関係については、大学生については、行動と他者の間に有意な相関は見られなかったが、それ以外では、各学年とも、各質問の種類間で有意な正の相関がみられた（表3）。

実際にとる行動が、自分の欲求や他者一般の認知とどのように関係しているのかを検討するために、相互理解得点と同調得点それぞれ

表3. 同調に関する各質問の種類間の相関係数

	中学 2年	高校 2年	大学 3年4年
行動と欲求	0.83**	0.82**	0.79**
行動と他者	0.59**	0.37**	0.21
欲求と他者	0.64**	0.30*	0.26*

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

れについて、行動の得点を目的変数とし、他者の得点を説明変数とし、欲求の得点を媒介変数として、学年別に媒介分析を行った。

その結果、相互理解については、いずれの学校段階も他者から欲求への正の関連性、および、欲求から行動への正の関連性が見られたが、欲求から行動への関連性は、学校段階の進行とともに強くなっており、仮説5は支持された。

ブートストラップ法による間接効果の検定の結果、いずれの学年においても、間接効果は見られたが、媒介変数投入後も他者から行動への直接の関連性は見られた。他者から行動への直接的な影響は中学生から高校生にかけて弱くなっており、仮説6は支持された(図3)。

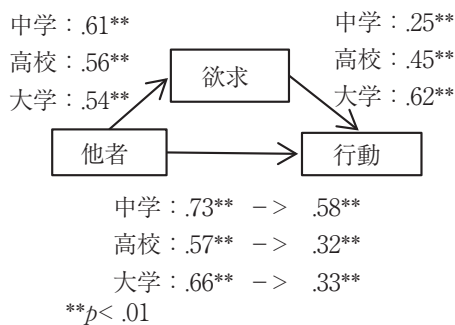


図3. 相互理解に関する媒介分析結果

同調する友人関係については、いずれの学校段階も欲求から行動への正の関連性が強く見られており、仮説7は支持された。他者か

ら欲求への正の関連性も、いずれの学年においても見られたが、学校段階の進行とともにその関連性は弱くなっていった。

他者から行動への影響については、中学生では、ブートストラップ法による検定の結果、有意な間接効果が見られ、媒介変数投入後は、他者と行動との直接的な関連性は見られなくなった。したがって、中学生では欲求を媒介として、他者が行動に間接的な影響をおよぼしていると言える。大学生になると、他者と行動との関連性はあるとは言えなくなっていた。また、高校生は中学生と大学生の中間的な結果であった(図4)。以上のことから、仮説8については、中学生の時期には他者認知が欲求を媒介として行動に影響を与えていたのに対して、学校段階の進行とともに、その影響は弱くなると言える。

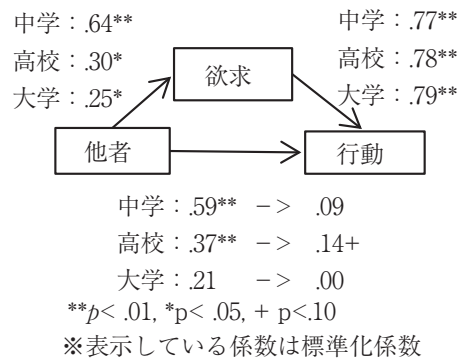


図4. 同調に関する媒介分析結果

## 考察

### 学校段階による違い

本研究の結果、学校段階の進行とともに、相互理解の友人関係は、実際の行動においても、そのようにしたいという欲求においても、自分のまわりの他者一般の認知においても、強まっていた。一方で、友人に同調する友人関係については、学校段階の進行とともに



に、実際の行動においても、そのようにしたいという欲求においても、自分のまわりの他者一般の認知においても、弱まっていた。したがって、中学生から大学生の時期における友人関係は、他者との心理的距離の取り方については、内面的な深い関係をとる傾向が強まり、友人との行動の異同のあり方については、同調的な関係をとる傾向が弱まるということが、行動・欲求・他者認知どの側面においても認めらると言える。

本調査が行われたのは2002年であるが、その後友人関係の持ち方は変わっているのだろうか。岡田(2016)は、1989年から2010年にかけて実施された大学生に対する調査研究の結果を踏まえて、「あたりさわりのない会話ですませる」、「友だちを傷つけないようにする」などの質問に対してあてはまると回答する程度は、年代とともにわずかに上昇する傾向が見られたものの、その違いは小さなものであり、この期間に大学生の友人関係が大きく変化したとは考えにくいとしている。質問紙調査はあくまで回答者の主観を答えたものであり、回答する際には自分と他者を比較してその中で自分の立ち位置を推定して答えている可能性があるため、実際の友人関係の持ち方が時代とともに変化している可能性は否定できないが、友人との心理的距離をどのようにするか、友人との行動の異同をどのようにするかということはやはり青年にとって大きな問題であり、青年の主観の中で自分の立ち位置は大きく変化したわけではないのであろう。本研究は、行動面、欲求面、他者認知面を分離し、友人との心理的距離の取り方に関する相互理解の友人関係と友人との行動の異同に関する同調する友人関係の発達的な変化を明らかにすることで、これまでの友人関係研究に新たな知見を提供し

たと言える。

#### 行動と欲求間、行動と他者認知間の違い

行動、欲求、他者認知の3つの側面を分離して調べたことによって、それらの間の関係を検討することができた。行動と欲求の間の関係について、岡田(1999)は、大学1・2年生を対象とした調査で、本研究で取り上げた相互理解の友人関係と同様の質問項目について、欲求の方が行動よりもあてはまるとする度合いが高いとしている。本研究では、いずれの学校段階においても、相互理解の友人関係について欲求と行動の間に差は見られなかった。岡田(1999)との結果の食い違いは、新しい学校に入学してからの期間の長さが関係しているのではないだろうか。岡田(1999)では、教養課程の授業において1年生と2年生を対象に調査を行っており、大学に入学してからあまり時間が経っていない人たちが多く含まれていたと考えられる。一方、本研究では、大学生は3年生4年生を対象とし、中学生と高校生も2年生を対象としており、新しい学校に入学して新しい友人関係を構築するまでに比較的長い時間が経過した人たちを対象としている。入学後間もない人たちにとっては、相互理解の友人関係を持ちたいと思ってもまだ親密さを深めきれていないため、欲求の方が実際の行動よりも高くなったと考えられるのに対し、本研究で対象となった大学生や中高生は、新しい関係で親密な友人関係を深める時間が十分にあり、欲求と実際の行動との間に乖離がなくなったのではないかと考えられる。

同調する友人関係については、中学生で行動よりも欲求の方が同調得点が高かったが、その違いは小さなものであり、高校生と大学生では行動と欲求の違いは見られなかった。

したがって、同調する友人関係についても、友人関係を構築するための時間を経過した後では、欲求と行動との間には大きな違いは見られなくなると考えられる。ただし、中学生において、同調する友人関係をとりたくはない（欲求は低い）が行動としてはとっているという結果ではなく、差は小さなものではあるものの、欲求が行動よりも得点が高く、実際にしている行動よりも同調する友人関係をむしろとりたいという方向に結果が出ていることは注目に値する。この点は、後の、行動と欲求および他者認知との関連性のところで他の結果と合わせて考察することとする。

行動と他者認知の間の関係については、いずれの学年においても、相互理解の友人関係については、自分の実際の行動よりも他者一般はそのような友人関係を行っていないと認知していた。また、同調する友人関係については、自分の実際の行動よりも他者一般はそのような友人関係を行っているとして認知していた。

このような自分と他者認知との間のずれは、他の研究でも報告されている。橋本(2011)は、他者との人間関係に埋め込まれた存在として自己を位置づける相互協調性、および、他者とは分離した独自の存在として自己をとらえる相互独立性について、現実の自分についてどの程度あてはまるか、他者一般についてどの程度あてはまるかと思うかを大学生を対象として調査した。その結果、相互協調性については現実の自分よりも他者一般の方があてはまると認知しており、相互独立性については現実の自分よりも他者一般の方があてはまらないと認知していた。

本研究で取り上げた同調する友人関係は相互協調性の一つの側面であると考えられ、それを実際の自分の行動よりも他者一般の方が

とっていると認知しているという結果は、他者一般の方が現実の自分よりも相互協調性にあてはまると認知しているという橋本(2011)の結果と一致している。また、相互理解の友人関係は相互独立性そのものとは言えないが、相互独立性と関連が深いと考えられ、それを現実の自分よりも他者一般は行っていないと認知しているという結果は、やはり、相互独立性が現実の自分よりも他者一般の方があてはまらないと認知しているという橋本(2011)の結果と一致している。

ただ、橋本(2011)では本研究で取り上げた欲求にあたる理想の自分の回答にあてはまるかどうか調べているが、その結果は、理想の自分の回答は現実の自分よりも、相互協調性についてはあてはまらない方向に、相互独立性はあてはまるという方向にずれたものだった。本研究では相互理解の友人関係については、実際の自分と欲求との間に差は見られておらず、同調する友人関係についても差は小さなものであり、この点は橋本(2011)の結果と食い違っている。本研究は、親しい友人との関係に関して質問を行ったのに対して、橋本(2011)では一般的な対人場面での行動についての質問であったことが結果の違いを生み出したのではないかと考えられる。すなわち、自分にとっての内集団と考えられる親しい友人との関係では欲求と行動の間の乖離は小さいが、自分にとっての外集団と位置付けられる人も含んだ対人場面での行動では欲求と行動の乖離が大きくなるという可能性である。この点については、今後の検討が必要である。

#### 行動・欲求・他者認知間の関連性

相互理解の友人関係については、学校段階の進行とともに、欲求と行動との正の関係が

強くなり、他者認知と行動との間には、高校生や大学生でも正の関連性が見られるものの、中学生よりは弱くなっていた。したがって、中学生の時期にはまわりの他者が行っている相互理解の友人関係のあり方に影響を受ける度合いが大きいものの、学校段階の進行とともにそれが減少していき、まわりの他者の行う友人関係に影響される側面は残してはいるものの、自分の欲求に基づいて相互理解の友人関係を持つ度合いが強くなっていくと言える。

同調する友人関係については、中学生では、他者認知が欲求に正の関連性を示し、欲求が行動に正の関連性を示すというように、他者認知は欲求を媒介として自分の実際の行動に間接的な影響を及ぼしていた。中学生において、他者認知と欲求の間に正の関連性が強く見られたことは、中学生は、他者の行っている同調行動を必ずしも否定的にとらえておらず、適応的価値を認知し、自分自身もそういった同調行動をとりたいと思っていると見なせる。中学生において、自分の実際の行動よりも欲求の方が、わずかではあるが同調得点が高かったことから、中学生は同調する友人関係を必ずしも否定的に捉えているわけではないということがうかがえる。

ただし、同調する友人関係を持つことが、適応感や精神的な健康をもたらすかどうかは、同調する友人関係を持ちたいという欲求を持つことと別問題である。ケイン他(2020)は、これまでの研究をレビューし、同調する傾向と適応感との間には負の関係が見られるものもあり、同調する傾向が高いことが適応感を高めるとは言えないと述べている。

本研究の結果が示していることは、中学生は、自分のまわりの他者が一般的に同調する友人関係を持っていると認知することによ

て自分も同調する友人関係を持ちたいという欲求が高まり、実際に自分も同調する友人関係を持つようになっていくというメカニズムである。わが国において同調圧力の強さが様々な問題を引き起こしているのではないかとすることは多くの人によって指摘されているところであり(鴻上, 2019; 山岸, 2011), 同調することが中学生の適応感などの精神的健康とどのように関連しているかは、今後明らかにしていくべき課題である。

同調する友人関係について、学校段階が進むにつれて、他者認知の影響がなくなり、行動はあくまで欲求に規定されていること、学校段階の進行とともに、行動も欲求も他者認知も同調得点が低くなっていくことから考えれば、同調する友人関係は、成長するにつれて、まわりがどうしているかとは関係がなくなり、自分がどうしたいかに基づいて行われるようになり、その必要性も感じられなくなっていくように思われる。

## 結論と今後の課題

現在は、SNSの普及によって友人関係を持つ媒体も、本調査を実施した時期と異なっている。ただし、友人関係に関する媒体の変化がその背景にある心理プロセスにまで影響を及ぼしているのか、心理プロセス自体には大きな変化はないのかということについては検討が必要である。

また、グローバル化の進展や多様性の許容が広く言われるようになってきた。日本社会の中で広く共有されている友人関係のあり方が、そういった価値観をあまり持たない人々との付き合いで変化していくのかどうか、今後も検討が必要である。

このような時代変化がありつつも、本研究で取り上げたように、心理的距離の取り方、

および、友人との行動の異同のあり方の2側面から友人関係を捉えることは今後も有用であると思われる。本研究は、この2側面について、行動・欲求・他者認知を分離して測定し、中学生・高校生・大学生にわたって検討することにより、認知された他者一般の友人関係のあり方に大きく影響を受ける時期から、その影響が弱まり自分の欲求に基づいた友人関係を持つようになるという自立過程を描き出すことができた。時代による変化の要因を考慮に入れつつ、親しい友人との関係と広い対人関係の持ち方の比較、同調行動のメカニズムに関する更なる解明を行い、対人関係の持ち方に関する諸問題を解決していくことが今後の課題である。

## 付 記

本研究は、松尾（旧姓：岩成）と村瀬がともに鳥根大学法文学部在籍中に、松尾が2002年度に作成・提出した卒業論文「青年期の友人関係における行動と欲求の関連」を村瀬がまとめ直したものである。

研究にご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

## 引用文献

榎本淳子（2000）．青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連．*教育心理学研究*, 48, 444 - 453.

橋本博文（2011）．相互協調性の自己維持メカニズム．*実験社会心理学研究* 50,182-193.

平石賢二（2010）．友人関係．*児童心理学の進歩*, 49, 27-51.

藤井恭子（2001）．青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析．*教育心理学*

*研究*, 49, 146-155.

ケイン聡一・小池真由・中島健一郎（2020）．同調行動研究のこれまでとこれから：動機に着目する必要性．*広島大学心理学研究*, 20, 121-132.

鴻上尚史（2019）．「空気」を読んでも従わない：生き苦しさからラクになる．岩波書店：東京．

松井豊（1990）．友人関係の機能．斎藤耕二・菊池章夫（編著）．*社会化の心理学ハンドブック：人間形成と社会と文化*．Pp. 283-296．川島書店：東京．

落合良行・佐藤有耕（1996）．青年期における友達とのつきあい方の発達の变化．*教育心理学研究*, 44, 55-65.

岡田努（1995）．現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察．*教育心理学研究*, 43, 354-363.

岡田努（1999）．現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について．*教育心理学研究*, 47, 432-439.

岡田努（2007）．現代青年の心理学：若者の心の虚像と実像．世界思想社：京都．

岡田努（2016）．青年期の友人関係における現代性とは何か．*発達心理学研究*, 27, 346-356.

上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護（1994）．青年期の交友関係における同調と心理的距離．*教育心理学研究*, 42, 21-28.

和田実（1996）．同性への友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連．*心理学研究*, 67, 232-237.

山岸俊男（2011）．「しがらみ」を科学する：高校生からの社会心理学入門．筑摩書房：東京．